

381-400. Okada, H. & M. Tamura 1979. Karyomorphology and relationship on the Ranunculaceae. Journ. Jap. Bot. 54: 65-77. Sorokin, H. 1929. Idiograms, nucleoli and satellites of certain Ranunculaceae. Amer. J. Bot. 16: 407-420. Tamura, M. 1966. Morphology, ecology and phylogeny of the Ranunculaceae VI. Sci. Rep. Osaka Univ. 15: 13-35. ————— 1968. ditto VIII. ibid. 17: 41-56. Taylor, R.L. & G.A. Mulligan 1968. Flora of the Queen Charlotte Islands part 2. Cytological aspects of the vascular plants. Research Branch Canada Depart. Agri. Monograph 4: 62-67. Wang, W.T. & P.K. Hsiao 1964. A new genus of Ranunculaceae—*Dichocarpum* W.T. Wang et Hsiao. Acta Phytotax. Sin. 9: 315-333, t. 32, 33.

* * * *

シロカネソウ属 *Dichocarpum* は約18種が東アジアの温帯より暖帯に分布する。多くの種は初め *Isopyrum* のもとに記載されたが、Wang と Hsiao (1964) により新しく独立した属に区別され、さらに花梗上部の形により 2つの節に分けられた。日本に分布するものはシロカネソウ節 Sect. *Hutchinsonia* にまとめられ、このうち5種で染色体数、 $2n=35$ が報告された。染色体数は分類群を考える上で重要な特徴のひとつと見なされており、この属に近縁なチチブシロカネソウ属、*Isopyrum*、ヒメウズ属、オダマキ属の染色体が $2n=14$ で基本数が $x=7$ であることより、この属の種は基本数が 7 の 5 倍体であると推定された (Kurita 1954, 1957, 1966)。しかしながら、今回、日本産のすべての種類、8種、2変種で染色体数 $2n=36$ を観察した。また花粉母細胞の減数分裂において、18個の2価染色体が見られ、1価染色体あるいは多価染色体は認められず、減数分裂は正常であることより、5倍体ではないことがわかった。従って、シロカネソウ属シロカネソウ節における基本数は $x=6$ あるいは $x=9$ と推定され、近縁な属と基本数が異なる。

□Gulden, G. & K.M. Jenssen: **Arctic and alpine fungi-2** 58 pp. 1988. Soppkon-sulenten, Wesselsgt. 3, 0165 Oslo 1, Norway. 極地および高山のマツタケ目菌類についてルーズリーフ方式で、一葉に一種ずつ、カラー写真と顕微鏡スケッチと記載と分布・生態などのメモを載せる。第1巻 (Gulden, Jenssen & Stordal 1985) で主に南ノルウェーの山岳地帯のものを13属25種（1新組合わせ）、本冊ではスピツベルゲンのもので1巻にない13属25種（1新種、1新組合わせ）を取扱っている。写真是ボタニカル・アートの伝統を感じさせ、羨ましさを覚える。

(三浦宏一郎)